倫風宏話

危機にあってこそ「たいらかに蕩蕩」たれ

上廣榮治

立春とはいえ、まだ春は名のみの厳しい寒さが続きます。寒風をつき雪を踏み分けて、日々実践に励まれる皆様がお風邪など召さぬかと、とかく気になる季節であります。しかしながら、寒さ以上に気になるのは、世の中の経済環境の異常なほどの冷え込みようです。我が会の皆様も、身近に失業や倒産を経験され始めておられるのではなかろうかと、あらぬ心配もつのります。

そこで、私たちは、かかる不透明な時代をどのように生き抜いていったらよいのか、また、身近に起こる不運や挫折に、どのように対処してゆくべきなのか、今回はそのあたりを考えてみたいと思います。

今日のごとき、あるいはかつての石油ショックやバブルの崩壊、あるいは阪神淡路の大震災などに見られた社会不安を伝える報道に接するたびに、思い出される含蓄深い言葉が『論語』にあります。

――子曰く、君子はたいらかに蕩蕩たり、小人はとこしなえに戚戚たり――

孔子は言う。君子（人間として立派な人）というものは、たいらか（穏やか）で、蕩蕩（のびのび）

としているけれども、小人（凡人）は、とこしなえに（いつも）戚戚（せこせこ、くよくよ）としているというほどの意味ですが、私にはとても大切なことが述べられているように思われます。

たしかに、昨今のように、テレビや新聞が社会不安を煽りたてると、人は往々にして「さあ大変だ」と思い込み、あれを心配し、これを悩んで、夜も眠れないということになりがちです。しかし、人として立派な人は報道や世間がどうあろうと、少しもうろたえることなく、自分の信ずる道を確実に踏んで、穏やかに、のびのびと生きてゆきます。

では、君子は何故に「蕩蕩」としていられるのでしょうか。「自分の道を知っているからだ」、私はそう思います。自分自身が、日々を生き抜いていくうえで、為すべきことと為してはならぬこと、いわば生きるうえでの原則とでもいうべきものを、はっきりと自覚しているから、いたずらに不安や懊悩に悩まされることがないのです。何が起ころうと、どのような事態に立ち至ろうと、敢然として為すべきことを為すだけだと思い定めているのです。

戦後五十余年、私たちは幸運にも平和のうちに暮らしてきました。経済は成長に次ぐ成長を記録し、国民所得も飛躍的に向上し続けました。しかし、この間の自由と平安に慣れきってしまった人々は、虚飾と個人の利得だけに「戚戚」として、人間としての基本のルール、人の道を忘れてきたのではないかと思います。社会全体が順調であるうちはそれでもなんとかなるのですが、ひとたび危機的な状況に陥ると、もう対処のすべを知りません。ただ驚き、慌て、混乱するばかりです。

人にとっての危機的状況とは、例えば終戦直後の都市部のような、住むに家なく、口にする物とて事欠くような状態です。虚飾を取り去った後の人に残されたものといえば、ただ人として生きるうえでの原則だけです。

つまり、そうした状態になってはじめて、多くの人々は、人として為すべきことと為してはならぬことに、やっと思い至るのです。しかし、そうなってしまってからでは遅すぎるのでありますが……。

この敗戦という危機的状況も、結局は軍隊や国が、さらには国民一人一人が、奢り昂り、己の利得に「戚戚」として、人の道を忘れたがために招来した破局でありました。そして、その大破局から五十余年たった今、私たちは再び危うい淵に立とうとしています。それは、経済や金融の問題ではありません。私たちが、人としての基本ルール、人の道を忘れているということこそが「危うい」のです。国民一人一人が、そして国自体が「小人」となって、我欲のみに「戚戚」としているのではないか、これはいつか来た道と同じなのではないか、そう心配されてならないのです。

もちろん、もしここで私たちが人として為すべきことと為すべきでないことをしっかりと自覚し、正しき道を踏んで行こうとするならば、いかなる危機に遭遇しようとも、何一つ恐れることはありません。ただ為すべきことに従って、誠心誠意行動するだけです。すなわち、順境の時と同じであります。

だが問題は、今や日本は国を挙げて「小人」となっているということであります。

不安な世の中には、流言蜚語がつきものです。週刊誌などには、毎号のようにどこの銀行が危ないとか、どこの会社が倒産同然だといった興味本位で軽率な記事が掲載されます。しかし、そうした記事を読んだからとて、人々が何をどうできるというわけでもありません。ただただ、さあ大変だと不安に駆られ、怯えるだけでしかありません。まことに「小人はとこしなえに戚戚」という状況です。

誤解を恐れず敢えて申し上げれば、この混乱せる今日の状況において、人として為すべきのなんたるかを知る会友諸賢は、よろしく今日の世にあっての「君子」であっていただきたいと願います。私たちが人としての為すべきことに専心すれば、いかなる危機をも乗り越えることができ、また破局を避ける

ことができるはずだと、私は確信しているからです。

幸い皆様は、いかなる困難な事態に立ち至ろうと、恐れず、逃げず、平然と、あるがままの現実をあるがままに受け容れて、静かに直視し洞察し、実践の筋道が見えたなら敢然と直進するという、現実大肯定の態度を身につけるべく、日々精進しておられます。そして、それこそが苦難を福門とする筋道であることも知っています。

昨年末の幹部研修会でも申し上げたことですが、先師は著書『生きる力』の中で述べておられます。「時勢の変動にビクビクせず、泰然として、きっと良くなるぞ、との希望を持ってこれに立ち向かうこと」であると。

万一、不幸にして身に苦難が降りかかったなら、日頃の実践が試される好機と受け止めて、倫理を道標に、迷うことなくひたすら努力することです。朝の来ない夜はない、それが道理というものです。

また身近に、世の荒波に呑まれた人がいたならば、恐れず迷わず、ただ人の道のみを踏んで生きれば、何も不安に思うことはないのだと、あなた自身の実践経験に基づいて心を込めて語りかけ、また、身をもって示してください。

先に引用した『論語』の言葉の次に、弟子の一人が師の人柄を「孔子は、温順でありながら厳粛だった。威厳があったが、苛烈ではなかった。礼儀正しく謙虚だったが、人を寛がせてくれる人だった」と評しています。もしあなたがそうした人であったなら、周囲の人はどんなに頼りに思うでありましょう。

世の荒波に翻弄されることなく、厳として倫理実践の道を踏み、人には穏やかで「蕩蕩」とした会友がある限り、今日の状況は、さほど憂うるには足りぬであろうと、私は達観しているのですが、いかがでありましょうか。